

学生相談室から見た現代の女子短期大学生の特性

神谷 かつ江 (教育心理学)

1 はじめに

学生相談室の相談員として、多くの女子短大生の相談にあたってきた。相談内容は進路や就職をはじめとして、友だちに関する相談、異性の相談、性格上の相談、劣等感、携帯電話のトラブル、インターネット上のトラブル、悪徳商法の相談、不安に関する相談、自殺念慮、リストカット、今後の生き方などさまざまなものである。相談内容によっては、情報の提供や指示的に接して1～2回の短期面接で終了するケースもあれば、共感的に理解し、受容的な態度で真摯に話し合いを継続するケースまでさまざまであるが、長期的なカウンセリングを求められる相談が多い。

学生と話し合い、相談する内容は、明るく楽しいものよりも、真剣であり、深刻であり暗い面が多い傾向にある。だから学生たちの特質を述べる場合も、一般学生の明るい面を浮き彫りにするよりも、学生の内面の深刻な悩みや苦悩が中心になりやすい。しかしそれは現代の女子短大生を特徴づけるものであり、一般学生にも共通するものと思われる。

そこで本研究では、これまでの相談を顧みながら、現代女子短期大学生の特質を述べてみる。方法は私自身の経験をふまえながら、他大学の相談員の報告や文献から報告する。なお事例の紹介にあたり、プライバシー保護の観点から一部改変していることを了解いただきたい。

2 女子短期大学生の特性

以下に述べる内容は平成12年度から平成16年度までの5年間の相談内容の特性をまとめたものである(資料1)。資料では8通りに分類してあるが、それらをさらに細かく検討し、18項

目にわけて論述した。

(1) 不本意入学生

来るべき大学全入時代をひかえ、自らの選択により短大入学を決める学生が多くなった。相談室開室当時の平成初期は、受験競争の全盛期であり、行きたい大学より入れる大学を選択して入学してくる者がいた。また国公立大学や志望大学が合格できずに、仕方なく入学したという不本意入学生も何人かいた。不本意入学生の中には、志望校に入れなかった挫折感や焦燥感をいつまでも引きずって、適応できずに退学していった者がいたし、再受験して第一志望大学に合格してゆく者もいた。その一方で、その悔しさをばねにして、自分の好きな学問やサークル活動にエネルギーをそそいで、自分の能力を十分発揮していった学生もいた。しかし幸いに現在ではそのころのような不本意入学生はめっきり少なくなった。

(2) 進学について

本学は、数々の資格取得が可能であり、卒業後の就職率も高い実績をあげている。四つの学科を設置しているが、食物栄養科は栄養士の専門家として病院や学校栄養士、事業所へと就職している。コミュニケーション学科はビジネス実務士や情報処理士を始めとして数々の資格を取得して東海県下の一般企業に就職している。児童教育学科は幼児教育、初等教育の専門家として、幼稚園や保育園、小学校の非常勤講師、福祉関連分野や一般企業に進んでいる。また人間福祉学科は介護福祉士の専門家として、高齢者・障害者施設や事業所に進んでいる。学生の大多数は卒業までに就職を決定し、その後落ち着いた学生生活を過ごしている。

学生のなかには更なるキャリアアップをめざ

して系列の女子大学や他大学に編入していく学生もいる。編入していく学生をみていると、幼稚園教諭2種免許状から1種免許状への取得、小学校教諭2種免許状から1種免許状への取得へと、キャリアアップに向け進学していく傾向が高い。一昔前のように、学生でいたいからなんとなく編入するという無目的型は少なくなったように感じる。

長引く不況の影響があるのか、経済的な理由でやむなく編入を断念しなければならない学生もいる。本人の意向は進学したい気持ちが強いのだが、授業料に伴う経済的負担を考えると、悪くて親にいいだせないというのである。そのような学生は驚くほど親の忠告に忠実であり親の指示に従っている。いじらしいほど親思いの学生がいる。相談室では就職課へ相談に行くことをすすめるとともに、卒業後の進路選択に役立つ情報を提供している。

(3) 授業に興味をもてない学生

平成17年度の大学・短大進学率は51.7%、専修学校も含めた高等教育機関の進学率は76.2%に達して、みんながいくから大学に進学する、親や教師がすすめるから進学するという学生は増加してきた。なんとなく短大生になってしまった学生は、何のために勉強し、どう役立てていくかという目的をもたないまま入学してしまうため、勉学意欲に乏しいことがある。資格を取得してそれを生かした職業につきたいという学生の中にも、実際に授業を受けてみると90分の授業時間は長くて苦痛だし、講義中心の大学の授業に興味を示さない学生がいる。学生の中には枝毛を抜いたり、外を見たり、自分の顔をあきもせず眺めてずっと化粧をしていたり、下を向いて携帯電話に執心する、授業に興味を示さない学生が若干ではあるが存在する。そういう学生は、時々では休むけれどもおおむね出席率は良好で、単位取得が不可能となるほど試験結果も悪くない。ただ活気がなくて勉学意欲が乏しいのである。

授業担当者もさまざまな教授法を開拓している。ビデオを見せたり、作業をさせたり、コンピューターを活用した実践的な講義をしたりと、

学生の集中力が持続し、飽きさせない講義を試みている。そうした試みから、意欲的な授業態度に変わっていく学生もみられる。

(4) クラブ活動でがんばる学生

次の文はある体育会系クラブ生の詩である。

もしも私がクラブに入っていなかったら、私は何をしていたのだろう。毎日友だちと遊んでのんびりしたり、化粧をしたり、髪の毛を染めたり、ダイエットしたりするのであろうか。もしも私がクラブに入っていなかったら、ストレスも溜まらないし、先輩・後輩に気を遣うこともないし、毎日平和で楽しく過ごせたと思う。もしも私がクラブに入っていなかったら、ボーイフレンドとときどきデートをしたり、ゆっくりお話する時間もあって、つらい思いもしなかったかもしれない。そして夏は外で汗を流すこともなく、クーラーのきいた部屋でくつろいで、のんびり本でも読んでいるかもしれない。

でも私はクラブに入っている。毎日汗を流して、自分と向き合っている。今はつらいが、自分の選んだ道だ。きっと何かが得られるであろう。だからがんばってやっつけていこう。

この詩を書いたのは、日夜練習に励むクラブ生である。同じ年頃の女子学生をうらやましく思いながらも、自分の選んだクラブ活動でがんばる様子が伝わってくる。

(5) アルバイトに熱中する学生

本学は少人数の学級編成を採用しているので、講義を欠席する学生は見つけやすい。欠席学生の中にはアルバイトに精をだす学生がいる。入学直後からアルバイトを始め、学生さんが来てくれたと大歓迎され、重宝がられ欠かせない存在になっている。アルバイトは講義を受けるより楽しいし、収入が得られるのでやめられないのである。人生経験にもなると思って、自主休講を続けていくうちに、たまに授業を受けてもさっぱりわからなくなってしまうという学生がいる。声をかけると、悪びれた様子もなく、欠

席届けを提出する。こうした学生のなかには、家計が苦しくてアルバイトをしているのだと自分を合理化して友だちに話している学生もいる。

(6) これからの生き方に戸惑う学生

自ら選択して志望して入学した学科ではあるが、卒業後の進路に結びつけることができず悩む学生は多い。授業態度もまじめであり、熱心であり意欲があるが、本人は何をやりたいのか、どのような道に進んだらよいかわからず悩んでいる。就職活動に乗り遅れることが多く、友人が進路先を決定していくのを横目でみて苦悶している。モラトリアム期間がもう少し必要な学生であろう。相談室では本人の興味や適性、性格や将来の職業などを十分に話し合っ方向性が見えるよう援助している。ほとんどの学生が卒業までに進学や就職を決定し、自分の選んだ道に進んでいる。

(7) 何回も留年を繰り返す学生

短期大学は通常2年間の在籍期間を経て卒業を迎えるが、何回も留年を繰り返す学生がいる。最大在籍期間が4年間でありそれ以上の留年はできないが、留年に伴う経済的負担は膨大な金額となることが予測される。とくに能力が低いわけでもなく、友人関係も悪いとも思えない学生が、出席不足で卒業できないのである。首をかしげてしまうことも多いが、本人はいたって大真面目である。毎学年クラスが異なるので、親しいクラスメートができることは少ないが、担任教員やゼミの指導教員のあたたかい配慮で意欲的になることがある。また自分からこっそり相談室を訪れて、息抜きしてから教室にもどっていく学生もいる。担当教員の意欲的な指導でなんとか卒業を迎えていく。

(8) 社会人学生

社会人学生が毎年必ず入学するようになった。社会人学生といっても、学生とさほど変わらない年齢差の人から、母親と同じくらいの年齢の人、または祖母のような人までいてさまざまである。また高卒で入学する人から、学士入学する人、再入学する人もいて学歴もいろいろであ

る。社会人学生の共通点は、資格取得を目的としている人が多いことと、身銭を切って学費を払っているので意欲的でまじめな人が多いということがあげられる。社会人学生の苦悩として、学生とのジェネレーションギャップが大きいだろう。年齢的に高齢となった社会人学生は、物怖じせずパソコンを操作したり、一度聞いただけで作業を始める学生を目の当たりにして、加齢にともなう能力低下を実感する。また私語などの迷惑行為や不適切な振る舞いをしている学生を見て、目を覆いたくなる場面に遭遇することもあると思われる。クラスにやさしく思いやりのある学生がいたり、同じような社会人学生が学科専攻に在籍しているときは、自然にクラスに溶け込んでいくが、そのような機会に恵まれない場合は、つらくさみしいものとなる。学級担任や担当教員がさりげなく声をかけて、社会人学生が孤独感に陥ることがないように見守りたいものである。

(9) 恋愛について

ここ5年間に恋愛に関する相談を受けることがめっきり増えてきた。元カレと復活したとか、恋人から振られてしまったとか、片思いで辛いとか、ボーイフレンドから距離を置こうといわれたとか、学生の恋の話は賑やかで華々しい。おとなしくて内気そうだし、この学生はまだ恋愛の経験がないだろうと高を括っていると、「妊娠しています」と聞かされ仰天することがある。そうかと思えば、素敵なお友達がいること間違いなしと予想される学生から、「お付き合いしたこと一度もありません」と小声で打ち明けられどうしたかと思ったりもする。相談室開室当時は、恋の相談は皆無に近かったしタブー視されていた。相談員には知られたく相談だった。しかし情報化社会が浸透しインターネットで何に対しても情報収集が可能となった現在、学生たちは恥ずかしがらずに堂々と、自らの恋の話を語る。

これも時代の流れなのであろう。

(10) 携帯電話にまつわる話

短期大学生の中で携帯電話をもっていない学

生はいないであろう。携帯電話はもはや情報交換、情報交流の必需品である。学生相談の会話の中から、携帯電話にまつわる話がよく聞こえてくる。気まづくなった友だちに仲直りしたくてメールをしても、メールが返ってこないと悩んでいた学生がいた。ボーイフレンドとのやりとりで、月額3万円の請求書が届き、親に叱られると困っていた学生もいた。誤ってタッチしたら、有料サイトに繋がってしまったと青い顔で飛んできた学生もいた。メールのやりとりは、面倒くさいという声も多く聞かれた。

授業中に下を向いて気づかれないようにメールを送信している学生もいる。歩きながらのメールはぶつからないかと心配してしまう。そうまでして誰かにつながってほしいのだろうか。携帯中毒にならないように注意したいものだ。

携帯電話は利便性を兼ねた有益な道具である反面、ときには学生の心を悩ます困った道具と化すようだ。

(11) 家族との関係について

「どのような家庭を築きたいですか」との問いに、学生は未来の家族像を真剣に思い描く。恵まれた家庭環境で育った学生は、自分の家庭を良きモデルにして、両親のような家庭を作りたいという。子どもはたくさんほしいが経済的に大変だから、二人までとなかなかしつかりした答えも返ってくる。このような幸せな家庭生活を送っている学生がいる一方で、つらい家庭環境の中で余儀なく生活している者もいる。仕事が長続きせず転々と職場を変える父親をもつ学生、リストラされて失業中の父親を支えるためアルバイトに励む学生、消費者金融から借金してまでパチンコに熱中するパチンコ依存症の母親と生活する学生、虐待されて育ったつらい幼児期など、例をあげたらきりが無い。家庭的な問題を抱えている学生は、覇気がなく気持ちが沈んでいる。家庭内のことが気になって遊んでも楽しくないという。このような学生は家族思いで気持ちがやさしい。その一方で、家庭内不和から家族と断絶している学生もいる。父親を毛嫌いして自分からかわりを絶って、一年以上会話がないうちという学生もいる。なかには不

安な気持ちを抑圧して遊びに転じる者もいる。派手な化粧をして友だちの家を転々と居座って、家に帰らない学生もいる。いずれにしろこれまで育った家庭環境が、卒業後の社会生活や結婚観に大きな影響を及ぼすことには間違いないようだ。

(12) 劣等感について

コンプレックスのない人間はいないだろう。人は誰しも知られたい劣等感情をもっている。青年期はこのコンプレックスに大いに悩まされる時期である。たとえば太っている、身長が低い、目が小さい、鼻が低いなど容貌に関するもの。頭が悪い、記憶力が悪い、成績が悪いなど能力に関するもの。長続きしない、根気がない、飽きっぽいなど意志の弱さなど。何かにつけて自分と他人を比較して、ネガティブな面が強調され悩んでしまうのが青年期である。コンプレックスの強い学生は、人間関係から退いて教員にさえ近づこうとしない。必要性にかられて仕方なく話さなければならないとき以外、コミュニケーションをとろうとしない。コンプレックスの悩みがはっきりわかるのは、2年生の就職活動であろう。どうせ試験を受けても落ちるからと、就職試験も受けようとする学生がいる。社会問題となっているニートと関係があるかもしれない。相談室では、自信回復を願って、可能な限り在学中の資格取得を勧めている。そして何でもよいから、このことだけは絶対に人に負けないものをみつけて、努力するよう助言している。

(13) 不登校について

小・中学校、または高校で不登校を経験した学生が、短大にも入学するようになった。中学校3年間を通して、まったく登校しなかった学生や、高校で不登校を経験して大学検定試験で入学する学生、通信制の学校を卒業してきた学生など、出身高校も千差万別である。不登校学生は傍目からはわからない。一般学生となんら変わることがない。しかしよく観察していると、対人関係に絶えずびくびくしている感がある。とくに義務教育段階の中学校で、ほとんど学校

に行けなかった場合、肯定的なわれわれ感情を獲得できないまま経過してしまうので、コミュニケーション能力に遅れがみられる。子どもにとって中学校時代はつらい時期である。第2次性徴を迎え、自分の体がどんどん変わってしまうことへの戸惑い、自立への準備、加えて勉強のこと、部活のこと、友だちのことなどいくつもの課題を克服しなければならない。この大切な時期に対人関係場面から退却して、人との交流を避けてしまうので、人間関係に自信がもてないでいる。不登校生にとって、女子短大は人間関係形成の再訓練の場であろう。

(14) 友だちが怖い

対人恐怖症とは、対人場面で不当に強い不安や緊張が生じ、その結果、人から嫌がられているのではないかと、変に思われているのではないかと恐れて、対人場面から避けようとする神経症の一種である。対人恐怖症は男子学生に多いといわれているが、女子学生にも若干名いる。対人恐怖が強い学生は友だちが怖いという。比較的慣れてきた友だちなら気後れすることなく会話が継続するが、半知り状態の、それも話したことの無いクラスメートにもっとも脅威を感じるという。対人恐怖症に対する誤解は、人嫌いと思われるところである。が、実際はその逆で、彼女たちは人間が大好きである。一人がどんなに孤独で、人間を弱いものをするかを知っている。人間が怖いけれども人間とのかかわりを継続していきたいというジレンマを抱えているのが、対人恐怖に悩む学生の特徴だろう。対人恐怖症にかかる学生は、とても繊細で敏感である。人の気持ちをすばやく察知する。「今この人、顔では笑っているが怒っているな」とか、「この人怖そうだけれど根はやさしい人だ」とか一瞬で相手の気持ちを読み取ってしまう。だから鈍感な人は対人恐怖症になることがない。対人恐怖症の学生は、話し始めるといっぱい話す。人に訴えたいことがたくさんあり、話すとき長時間になることがある。相談室では、学習理論に基づいた行動療法によって態度変容をはかっており、徐々にではあるが成果をあげている。

(15) 自尊感情の喪失

女子短大生を悩ますものに自尊感情の喪失があげられる。自尊感情とは自分という存在に誇りをもつ感情のことで、自分に対する肯定的感情をいう。しかし女子短大生は自尊感情が喪失されやすく「自分はだめな人間だ」「みんなに嫌われている」「自信がない」などネガティブな自己像を持ちやすく、自信を喪失していることが多い。ある学生は「あなたはクラスの嫌われ者」といわれた言葉をそのまま信じて、反発することもなく、自分はその通りの人間だと思い込んでいる気の毒な学生もいる。またある学生は友だちが自分を避けていると思い込んで自分から友だちを求めず、自分の世界に閉じこもってしまう学生もいる。自尊感情の喪失は人間を弱い存在にしてしまう。女子短大生は往々にして思い込みが激しく傷つきやすく、被害感情を持ちやすいので、周囲の人はその心情を正しく知ることが大切であろう。

(16) 発達障害について

発達障害支援法が平成17年4月に施行され、発達障害のある学生の状態に応じて、大学及び高等専門学校は、適切な教育上の配慮をすることが求められるようになった。ここでいう発達障害とは、自閉症や、アスペルガー症候群、その他の広域性発達障害、注意欠陥多動性障害、学習障害などをいう。

文部科学省は平成14年に、全国の小・中学校370校の通常の学級に在籍する4万1579人を対象に「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」を行った結果、「知的発達に遅れはもたないものの学習面や行動面の各領域で著しい困難を示すと回答した児童生徒の割合」は6.3%に達したと報告している。また国立特殊教育研究所が平成15年度に一部の大学等の高等教育機関に調査したところ、身体障害のある数倍もの発達障害の学生がすでに大学で学んでいることが明らかになった。この結果はいうまでもなく、短期大学にも発達障害学生が存在するということを意味している。

学生相談室へ発達障害学生が来室することは

皆無に等しいが、今後、学級担任や事務局と連携をとりながら、大学生活や授業においてサポートしていかねばならないときが来るだろう。

(17) 友だちについて

女子短大生にとって友だちは、なにものにもかえがたい大切な存在である。短大生活が実り多い充実した日々になるか否かは、良き友だちに恵まれたかどうかで決まってしまうといっても過言ではない。女子短大生は例外なくグループを作りがちであり、入学してすぐに、5～6人の小集団をつくる。このときのメンバーは、たまたま入学式で隣りだったとか、出席番号が近かったりとか、同じ班であるとか、通学路が同じ方面だったという物理的・心理的に距離の近い者同士が結びつく。なぜ出席番号が近かったり、入学式でたまたま隣り同士だったものが、仲間になりやすいかは、初期の友人形成には物理的接近性が非常に大きな役割を果たすという(フェスティンガー)。その理由として、①近くの方は労力もかからず心理的報酬が大きいこと、②近くの方は知り合うチャンスが多いこと、③毎日同じ顔を見ていると安心感がもて、自然と親しみがもてるようになるという。

さて物理・心理的に近いグループのもの同士が、類は友を呼ぶといわれるように似ていたり、行動を共にするうちにしだいに愛着まで発展するケースは、卒業までグループが継続し、平穏な学生生活を過ごすことができる。ところが思考の相違がわかり趣味も興味も異なるグループに所属していた場合は、その後の学生生活は落ち着かず地に着かない状態となる。所属感が根底から揺さぶられるのである。それならば、別のグループに参入すればいいと安易に思っても、そこには強固な壁が形成されて、外部からの侵入を阻止することを彼女たちはこれまでの経験から知っている。だから彼女たちはリスクを冒してまで、グループから抜け出ようとはしないし、いったん入ってしまったグループ内で律儀に生きようとする。

友だちから排除されないように、学生たちも必死である。トイレまで一緒について行ったり、同じような服装をしたり、共通の趣味をもつよ

うにと、さまざまな努力をしている。相手の話しに合わせたり、相手の顔色をうかがって一喜一憂している場面もある。お揃いのスウェットパンツで行動している学生は、仲間であることの証なのであろう。

学生たちから聞いた嫌いなタイプの友だちを参考まであげると、人の悪口をいう人、ボーイフレンドの話しかしない人、自己中心的な人、自分の自慢ばかり言う人、うそをつく人、自分の意見を押し付ける人、人のせいにする人、まわりの意見に流されて自分を出さない人、うじうじしている人、はっきりしない人、人によって態度を変える人、気分がムラがある人、つまらなそうに学校行事に参加する人、自分のことは棚に上げて人の文句をいう人などが、排斥されるという。自分を理解し必要としてくれる友だちと、安心して所属できるグループの存在が、女子学生には欠かせないようである。

(18) アイデンティティの確立に悩む学生

エリクソンは「自分とはこういう人間である」という明確な自己意識をアイデンティティと名づけ、アイデンティティの確立が青年の課題であるという。アイデンティティが確立している人は、今の自分は過去によって作られ、過去の自分と今の自分は連続しており、5年後の目標に向かって今の苦しみに耐えることができるという。しかしアイデンティティが拡散状態にあると、過去の自分と過去の出来事を受容できなかったり、未来に対して非常に焦りを感じながらも現実の日常生活が怠慢になったり刹那的になったりしてしまうという。鑑(1990)はアイデンティティ拡散の状態を、「自分」意識が不確実で、「あれも自分」「これも自分」という意識があり、自己意識が一定しない。本当の自分はどれかと尋ねられても、どれが本当の自分か確信が持てない。極端になると、「ふわふわ風船のように自分が漂っている」といった意識状態になっていることもあると説明している。こうした青年期特有の精神的危機状態を青年期危機と呼んでいるが、学生相談室にはこうした学生が相談に来室する。ここでは女子学生特有のリストカットと不安について述べてみる。

(a) リストカットを繰り返す学生

自分の手首を傷つける学生がいる。自らの身体をかみそりで傷つけて自己破壊行動をおこす。リストカットをしてしまう学生の多くは、自己愛的で対象喪失に対する耐性が弱く、うつに陥りやすい傾向がある。またいずれも幼少時より母親との関係が不安定で、正常な母子分離ができなかった学生に多くみられた。ある学生は、遠足のバスの車中でパニック状態となり、リストカットしたい衝動にかられた。隣の席に誰も座ってくれない寂しさと、車中でのクラスメートの楽しそうな雑談が原因であった。バスから降りると、猛烈に切りたい衝動に駆られ、人ごみ離れた場所であわや切りそうなときに、状況を察知した友だちから呼ばれて、ようやく落ち着きを取り戻していった。またある学生は友だちとの間が不安定になると、リストカットを繰り返し、包帯でぐるぐる巻きになった傷跡を自慢げに見せてくれた学生もいた。いずれも母親との関係が不安定で基本的な信頼関係が形成されていない学生に見られた。相談室では支持的に接して、理解され支えられているという環境を作り、安定した関係をつくるよう努めた。

(b) 漠然とした不安に苦しむ学生

不安のない人間はいないだろう。人は生きている限り、不安や葛藤の連続であり、見通しが暗かったり、愛する人を失えば誰でも不安になるものである。女子短大生に限らず、青年期はなんのために生きていくのか、自分とはなにものなのかということ絶えず探し続けている。身体的にも精神的にも大きな変化を迎え、社会的にも大きな課題を課せられた期間である女子短大生は、青年期の発達課題であるアイデンティティの確立の困難性から、リストカットや摂食障害などの自虐的傾向へ逸脱していく例も少なからずある。行動化をおこすことで不安を抑圧する学生がいる一方で、漠然とした不安に襲われうつの状態になってしまう学生もいる。

笠原嘉(1981)は、不安を健康範囲内の不安と、

対象や理由がわからない病的な不安に分けて、以下のように分類している。

不安の病理 笠原嘉より

<p><ノイローゼ性の不安> 理由がない 表現しにくい わかってももらえない がまんしにくい 長く続く またこないかと不安になる</p> <p><健康範囲内の不安> 理由がある 表現できる わかってももらえる がまんできる 長く続かない いったん去れば気にならない</p>
--

短大生は2年間という短い期間で、将来の進路を決めなければならない。1年生で新入生、2年生で卒業という慌ただしい学生生活である。その慌ただしさのなかで、在学中に方向性が定まりそれに向かって前進していける学生は、そのときどきの不安を上手に対処して社会適応も早い。ところが方向性が見えず、自らの能力の限界に苦しみ、アイデンティティが拡散状態になり、漠然とした不安に襲われてしまう学生もいる。相談室では学生の気持ちを十分に聞いたうえで、不安があまりにも強い場合には、病院を紹介するなどその状態に応じた対応に当たっている。

おわりに

学生相談室から見た現代の女子短期大学生像についてまとめてみた。多くの短期大学が4年生大学に統合され消えていくなかで、短期大学を自ら選択し将来の目標に向かってひたむきに生きる女子短大生は、4年生大学の学生とは違う苦しみや悩みがあったと思われる。本稿においてそれが少しでも明らかになれば幸いである。

学生たちは2年の在学期間を経て卒業してい

く。これまで多くの学生が悩みを打ち明けてくれ、彼女たちの心の内を一緒に共有させていただけただけことは私の大きな財産となっている。学

生たちにあらためて感謝するとともに、彼女たちの未来が幸多かれと祈っている。

資料1

学生相談室利用状況(述べ回数)

年度	内容	学業	就職	進路	課外活動	対人関係	家族関係	心身健康	その他	計
平成12年度		2	3	9	0	18	2	54	10	98
平成13年度		0	5	12	0	18	5	36	15	91
平成14年度		5	0	10	0	20	2	60	8	105
平成15年度		0	2	2	0	23	8	119	21	175
平成16年度		3	1	12	0	71	8	6	19	120

参考文献

坂野雄二他 ベーシック現代心理学「臨床心理学」

有斐閣 2002

松原達哉 「学生相談室から見た現代学生像」

学生相談研究9 1987

拙著 「女子大学生の教育相談に関する

研究」東海女子短期大学紀要 1999

—児童教育学科 初等教育—